

語林類葉

けこ

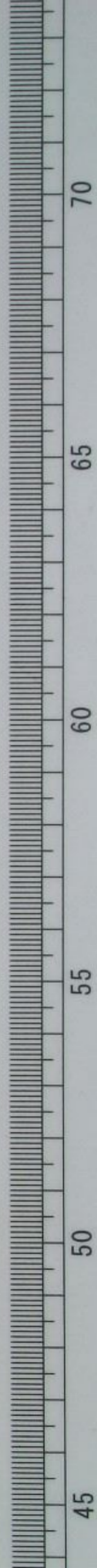
七

三

ホ 2

502

7



極味也其味甚佳  
其味甘香且能  
消食化積其功  
甚大凡食積不  
化胃弱不思食  
者服之立見效  
驗其味甘香且  
能消食化積其  
功甚大凡食積  
不化胃弱不思  
食者服之立見  
效驗



語林類集卷之七

清々濱臣輯

けの部

一言

け 襲ケ。あまてり常カ。

長明無名抄上ケのカをカ一ケとカのカ

國王大臣のけカのカとカはカとカのカ

長明無名抄カ百五十カ能カ

因法師の抄カ白川の園カをカけカ

とめてカふくカてカ多カはんカ。袋抄子同

加木門  
番 502  
巻 7

〇活本枕冊子 し移りし... け 列の春曙枕本  
から...

け気  
万

後拾遺 和泉寺那

夫木二 经信

〇守の保 国譜上 甘  
け...  
とそ...  
唱病

師光集

夫木三 公朝

け...  
け...

け 鏡

四季談 七月  
鏡をくひ

け 耕 經の約

五二

け 殊

澗 少女 あまのついでに色にさかすかして

色まじり ○ 同 同 いよけいよけいよけいよけい ○ 真木柱 殿

も用意したまはしりしきさかすかに色にさかすかして

○ 新古今秋上 好老 家より色に朝顔の花 ○

け 故

昔花 月宴 十五 夕 夕のけいよけいよけい ○ 竹取 けいよけいよけい

〜 神解さきま ○

け 寶

異拾三

遊糸日記

月詠集卷下

後拾林上

あけつあけつ

○ 大鏡

○ 土佐日記

うさきもいれし 思ふんあまのいれし 思ふんあまのいれし

と おいしきて

け

朝明 五七 ○ 朝霞 五七 ○

け 筍。寄飯

散木集 迹懐  
寄飯の海をいふるのワリて言はるし  
あまのりる多ゆも出

支木廿三

二言

けう 孝

茶花 廿月宴  
いふる西にた ちりて言はるし  
あまのりる多ゆも出

けう 伊呂波ノ終字京

高野日記伊呂波四十八音哥京

京ニ教ヲヨセタルニヤ 又 ○江詠林

け、

盛衰記十九代殿ノ御座スル処ヲ黒隠カ、ケ  
ウハケバハキヲ○同世七葉下々ヲハキ城戸  
口ニ責寄テ

け 家見

竹取 ちりて言はるし  
あまのりる多ゆも出



けし  
堀百 後頼

文木六 建長八年百々分合 信言  
山崎にありありいなるのまのつーにたたりて流すにけし

判者知家卿云つーのまのつーにたたりて流すにけし  
書にいつーのまのつーにたたりて流すにけし  
そとにありてけしにけしにけしにけしにけしにけし  
にけしにけしにけしにけしにけしにけしにけしにけし  
みしけしにけしにけしにけしにけしにけしにけしにけし

けし 券の請文

落くほ三ーウ 男君りんいありてけしにけしにけし  
けしにけしにけしにけしにけしにけしにけしにけし  
けしにけしにけしにけしにけしにけしにけしにけし

三言

けし 月水  
きつ保 けしにけしにけしにけしにけしにけしにけし

けし 頭昭。音語類稿ニ出ス  
けしにけしにけしにけしにけしにけしにけしにけし



けしき 字音轉訓

弁乳母集

浅うきあらしのきりぎりすのこゝろをしのびて

○後撰巻四 人のこゝろをしのびて

けしきを見てもあはれなるものぞ

堀百

○後撰雜一 うきあらしのこゝろをしのびて

けしき時 ○伊物 けしきあらしのこゝろをしのびて

○後撰巻三 うきあらしのこゝろをしのびて

けしき ○伊物 けしきあらしのこゝろをしのびて

夫木世一 祐拳

神皇正統記 卷之四十一 伊弉諾大神

後拾賢 右大臣孫高

けしきあらしのこゝろをしのびて

同春上 兼武彦

けしきあらしのこゝろをしのびて

同春上 隆経

同同 右大臣北方

同同

けさう 化粧

落くはし 上廿三 けさうの化粧

けさうの化粧

あらしのこゝろをしのびて

廿



けうきう

きつ保 拳徒 え務く

はあ〜

いふあまも〜

あくと〜

けうきう

拾玉四

法華經陀羅尼

〇

けうきう 交易

延喜式一交易商布〇多り保

にしきをけ國にう〜ぬ〇同 後原君

きく

けきき 気清

為志百々 仲正

けいけい



けいふく

業流 その流

清慎の流 清慎の流

つきし

けりあ

後撰 五 九大臣

清慎の流 清慎の流

清慎の集

同

清慎の集

多海 清慎の集 清慎の集

○

けつぎ 氷 削氷

業流 峯の月 清慎の集

〜 清慎の集

多海 清慎の集 清慎の集

心め 清慎の集 清慎の集

次席 新任大臣大饗云 清慎の集

等 同 五 列見首書粉熟又加削氷列見延引及

暑月取用之

けりあ

気

茶苑 月宴 十二  
此に今もその如き世多き故に枕冊子 十三  
ふいふら、あほ世をたえぬくそあはきとひく  
ちをうらうら。

烟屋 ケブリヤ 今云烟出之カ又大火ヲタク下屋カ

今昔廿四廿七曰ク荒テ人氣十之屋共ニ皆倒頌  
テ只烟屋計残タルニ。

頭證 ケシヨリ

居家必用曰頭證謂知見爭端之人也。陳遵曰

尤旁知狀謂之見證 該草。

五言

けう多し 真違  
袋中子 範兼少 有真違之気。

けーうは

枕冊子 ウカセ けーうは ウカセ けーうは ウカセ  
ソノ茶苑 モ屋 美ーうらうら ウカセ 源 東  
けーうは ウカセ 増鏡 ウカセ けーうは ウカセ

しつらりかゝるのぬきかきしめてあつて暗い所の袴長から  
にふら垂て火さも一色。女も向に長カケの袴も一  
何してさる。

結政座

五代雜二外記廳結政座に在まのく一木の  
に結まゝをゆりまゝのつらたにさる。

いふ一のあるお給のまゝらさるるはたるほ  
続後拾雜中

けつほり

今昔廿三 陸奥云云 糸 戒し = 蹴躓う倒タルヲ

けつま

讚岐日記 けつまのあまゝぬきけつりまゝに  
うらにええて枕冊子四 けつまをけつりまゝに  
まゝの源 痛

けつま

けつま 削掉  
きつ保 糸使 けつりまゝにけつりまゝに  
十三

ともをさつ

けづる苑

古今物名 糸とたつり苑 ○同余枚集く

新古雜上

佛名ありしうり苑を指して

朱雀御宇

同 苑山院ありて又のこしり苑名ありし苑につけて 苑のさつり苑

○雲図抄の図を ○延喜式図番式

けふまに

後環

○拾遺集外下 廿五

六言

京りる今俗ニイフ若者ノトク童子ニハアラス

苑のさつり苑 とうほに中の苑をさつり苑

さつり苑のさつり苑のさつり苑のさつり苑

調鶏ノ ○さつり保の調

外殿腹

後拾遺集 大中は補長とさつり苑に内殿のさつり苑





けうの子が竟ぬんきた

兼光 三月喜 又ひさかたのまの竟ぬんきたに清心

を〜〜〇悪管世 賢子 賢ぬんきたとさきいへ〇

十四言

けむか〜にあいぬ〜みよの〜

兼光 見くそぬま

この部

一言

菓子

竹取口侍中屋のふき子にのきほふ〇大和物語

子〇司あつは こい子 〇 源大御 〇 源 列珠

〜〜〇

菓籠

新千衣傷白う籠めて花さそつらして 元良親王 〇

源 初子 ちけいともうさねし 花鳥山融 〇

花 檜 破 山 破  
一 一 一 一  
一 一 一 一

院子日御幸檜破子居御前ニ○拾遺雜覽大  
 貳国章のむすのいたるをりて○同同正月五  
 日ちをきしつちをけのちた入て為正の朝臣  
 のむすにちるま道綱母○源柏木  
 ちのむす

二言

<sup>ナニカ</sup>果講  
 後拾遺釈教山階寺の涅槃一○同同故土御門  
 右大名家の女房車三々一○菩提一に集て

涅槃  
 菩提  
 禮拜  
 阿彌陀

普賢  
 菩薩  
 迎  
 果  
 報恩  
 舍利  
 又舍利會

○統詞連哥日吉社の禮拜一○同同ち  
 中名の細後あゝ多講おらぬ一○拾玉七八文治  
 六年二月廿八日山王一○源松風一に集り  
 て月一十四十五日つらつらにあふをきいふけん一  
 あふ一さうを佛の三昧を一○河海十  
 四日 普賢 十五日 阿彌陀 晦日 釈迦 ○筆苑 疑 六  
 波羅密寺皇林院のぼき一○同同 王をりあ一  
 心一のむす一○同 齋着裳 令をり一○經藏鐘  
 樓のむす一に一○新勅  
 雜三報恩一に一名

をうきつゝ後てをきけり。○詞苑雜下舍利講の

ついでぬ。

拾玉七隻日舍利講添次同詠十如法文和哥  
如曼縁のあまきし佛種もあはれり

○舍利式 明惠作 季吟廿○宗苑 そのあひ 又山の座

主山の舍利を女房ををみまぬといひくちをいひて

舍利舎せんとし舍利は所りくき多しはつゝ多きを

世の中の人々集りなつゝををるゆゑ 中畧 先年にも山の

座を意も傷正んゝの御免にこそ今多しといふ所を

そのあひしとて多しを多しきいふしと世にやいし

きこはそいひてそのあひもりも。○金葉雜下醍

礪め舍利會に○古今別うきんかんのみまの舍利

會に山のほつてうきに横の花をきかして先

傍に遍昭 ○余枚廿八○三代実録第十三云貞

観八年六月廿一日甲午為延暦寺立式四條其

二禁制供舍利會職掌僧嗣息曰舍利者故座主

○壬二下前大僧正の報恩講のついでぬ 意田かゝる

○ 意田かゝる

おけ 今も俗言ニイヘリアマリニ心アサクオモムキナキまて

長明無名抄上あはれにらけをきこいらにそや ○同

一いさきて  
一いさ

うらあけうらあけうらあけ

五師

源玉<sup>ろ</sup>が<sup>と</sup>も<sup>ろ</sup>も<sup>ろ</sup>の<sup>う</sup>き<sup>し</sup>大<sup>ま</sup>の<sup>り</sup>河  
八幡宮五師貞観八年別當安宗之收以運如法  
師始神五師○

栗

栗<sup>り</sup>香<sup>か</sup>の<sup>り</sup>火<sup>の</sup>あ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>  
○和名奉送具香興<sup>喪</sup>礼<sup>回</sup>云<sup>乃</sup>古<sup>之</sup>○同同火興

香のり  
火のり  
蠟燭のり

同云蠟燭興<sup>今</sup>○和名腰興<sup>太古</sup>○竹取<sup>あ</sup>の<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>  
由俗云火興<sup>是</sup>○<sup>う</sup>ら<sup>あ</sup>け<sup>う</sup>ら<sup>あ</sup>け<sup>う</sup>ら<sup>あ</sup>け<sup>う</sup>  
記十二讚岐院ヲ張樂<sup>ニ</sup>ノセ奉テ○

あそ社

万四<sup>タニ</sup>直<sup>アヒテ</sup>相<sup>ミテ</sup>而<sup>テ</sup>見<sup>ル</sup>而<sup>テ</sup>首<sup>ノ</sup>耳<sup>コト</sup>社<sup>ニ</sup>○縣居<sup>前</sup>云<sup>乞</sup>を<sup>あ</sup>そ  
訓<sup>を</sup>入<sup>ル</sup>社<sup>ノ</sup>物<sup>を</sup>祈<sup>ヒ</sup>乞<sup>ヒ</sup>を<sup>あ</sup>そ<sup>の</sup>言<sup>を</sup>社<sup>を</sup>  
傍<sup>を</sup>あ<sup>そ</sup>

あそ





○玉葉雜一 卯にまこゆき 海生の 卯の 福風 さらる

とくらのまこゆき かつえー なるまこゆき 卯にまこゆき

玉葉雜一 神を月の一日の人のまこゆきに 中勢の男平親王

人をまぬけぬ さらるに なるまこゆき 神のまこゆき

○

いかり 陰路 〇コサ 〇和障カ

拾遺 〇山 〇さらる 〇あつた 〇もも 〇の 〇あつた 〇人 〇なる

御前

志のま福上 〇さらる 〇ぬ 〇ち 〇なる 〇なる

源 小芥

雪 〇さらる 〇ま 〇なる 〇なる 〇なる 〇なる 〇なる

あそび 小袖

言塵集序 あそび 〇小袖をまこゆき 〇なる

おのの きぬ 〇さらる 〇なる 〇なる 〇なる 〇なる

家集下 〇長明無名下 〇盛衰記四十五

裕ノ小袖 = 白帷取具ノ



金葉雜上 大系の行 聖人のまゝに小神を祀りて 天台座主仁毫  
あまをばんとさふらるるに摩りまじし くらむ神のまゝくもる

○

おぬい 古代

榮光 月宴 廿二 ちよーおぬい ねりていそ 〇

おむら

保妻廿集

ふじとちくとさふをさむはふまきはさふはいてふゆにそる

○源 夏浮橋 天物 おむらふさふらるる 〇同 年習 きつ祓

おむらふさふらるる 〇河 樹神 木神 魍魅 魍魎 空谷

響 大日經 九傳注曰 魍魅 山林異氣 所生 為人害

者也 〇今昔廿七 木等モ皆久しくナリテ 樹

神モ注ヌヘシ 〇

おとん

ちちをうがいらうきあてさくあねていひー古度婆曾い 屋籠

本居氏云はねぞをそみたまをそめて 〇古今集序 〇六帖

題 おとん

おとみ 見物事

薔花 月宴

あはれきささるるにまはるる花の

あはれ 小鍋

あはれきささるるにまはるる花の

夫木ニ 寂蓮

あはれきささるるにまはるる花の

○

あはれ

事文類聚前集 十月部云初学記云冬日其暖  
如春故謂之小春

あはれ 小鬢

あはれきささるるにまはるる花の  
あはれきささるるにまはるる花の

あはれ 細枝を

盛衰記 十二

折梁垂木 コマイ 十 十 八

虚空ニ 散在シテ

あはれ

河海細分○源少女  
あてくめあまけそちうのあは  
きりもあてあかりり○

おんぐ 金鼓

和名伽藍貝金鼓 和名比 又鉦鼓ノ條ニ金鼓下  
良加祿  
り○拾遺雜春あんくうち傳々時烟之き傳々を  
ててきみゆりり 後系長祿  
○新拾春上 百奇の金口  
うきせうそんとしてほせまうりり○いほぬー かとも  
ぬとさきなきくあんくうちあうをみるに○元帥集  
極楽寺日多うにあうくうちゆりーに○枕冊子細

さうぬるものぬきーてあんくうちあまをがーりり○  
江次第ニ圖書金鼓ヲ打テアリ○異本能宣集  
秋百奇にあんくうち傳々としてゆめ葉た紅葉のあうく  
ちうきくまうゆりり○今昔廿九 九 金鼓ヲ和  
テ万ノ所ニ阿弥陀佛ヲ勧ノ行ケルニ

おんち 子持

袂衣ニ上四 大まを子持のうにまうりり○葉  
荒 梵王着 あまちあはゆりり○同衣珠 あまちあはゆりり  
もあまほえまをゆりり○きつ保 葉用 あまちあはゆりり

つらつらの女御の源宿木

三十〇源水麻串

つらつら 明石上

小弓

異本拾玉 喜遊  
秋のつらつらのなまはらまの姫さきさきとまのこゝろのつらつら  
金葉雜上

〇蜻蛉日記丁のまうらにむむし下きつらつら

つらつらまの〇源氏

後拾遺誦諧

おとみ 曆

安七 廿七 〇日用工支集 室萃 老師 應

安七年三月四日浴干熱海蓋三島曆以是日為

上巳〇

夫木六 後成

目

つらつら

谷田目  
細くまのつらつら

○平家物語 ちんちん 〇

おきほせ

古今春上 素性

おきほせし 桜 〇

六帖 同

おきほせの 花 〇

〇コキマセハカキコセ 古 〇

送 〇

新 〇

おきほせ 心葉

玉小櫛 繪合 〇

おきほせ 〇

おきほせ 〇

おきほせ 〇

おきほせ 〇

おきほせ 〇

おきほせ 〇

おきほせ 〇

おきほせ 〇

ノ入タル上ニ飾ニ置モノ也。倭訓禁可考。○  
拾葉雜上拾葉ノ字ニ入ルモノ也。○倭訓禁可考。○  
にしまてしつゝはよき

あつちきりしつゝはよき

○源 銚合 中君くまの御子

沈めしつゝはよき

○菊花笑むしつゝはよき

の枝くまの御子

そはくまの御子

トテ梅ノ枝ノ千ヒサクツクリタルヲ此鬘ニ

新六 ちうけ 衣笠

ちうけ 方便ノ意

後拾 化城喻品ノ系 新集門

ちうけノ字ニ入ルモノ也

○家集ノ作為ノ意ニイヘル例 燈集廿二玉

ちうけノ字ニ入ルモノ也

そはくまの御子

ちうけノ字ニ入ルモノ也

増鏡 ちうけノ字

たしき

宝物集一

○きのむね上 たしき

出多し○古本今昔五たしき  
○今昔廿七たしき  
ノ塵許有ケルヨリ此板コックトミテ入ヌ○  
同廿八<sup>廿八</sup>長キ沓ヲ履シコクメキ行リニ○

たしき

木造

たしき  
たしき

あしき同同  
あしき

たしき

あしき  
あしき

あしき  
あしき

たしき

言断

○長明無名抄下  
あしき

おとらさ

兼光 卷山 四十一 言のついでに書き 珍宝及王位 ○

おとく 巻

源 巻 おとくはみづのうへをめぐりて中侍人 ○

おとくさき

體源抄之和琴のりや或人云琴作木ハ長キ一寸八分牛角にて作し雁の胡弓にうつる時琴の響をくはくこくを伝ふをゆめを摸る ○

おとくさき 言灵

堀百葉巻

おとくさきのあつし 玉葉巻 記破帝 後 玉葉と相成

○ 保妻女集の詞より川を流るる日のとらさ 玉葉と相成

○

おとくさき 事託。言託

万葉八 三十大伴田村大娘

古郷之奈良鬼之岳能霍



公鳥言告遺之何如告寸八〇拾遺コトツゲハ大伴像  
見とてふつてさき〜中務内侍日記  
内侍よめ少將にあつつけ〇言託めて今伝  
りこつけぬ

ふ〜りし

保憲女集 ぬほそを紙一紙にそゆ〜  
いふ〜〇汝石五世間ノ諺ニモニキレルコブ  
ニエメル面ニアタラストラニ〇同五ツル  
ノハキモキルヘカラスカモノハキモツクハ  
カラス〇うつ保こ〜つけ ちき〜ぬり けそそル人〇

同 同 針あててふ〜子〜きなきのま〜  
後ほ〜 〇同

多京の天 多の〜り〜  
宝持主ヲエリ 〇源

胡蝶 せめふ〜の後おちるをさき〜おほりて 〇河海云

後の親を親とせし〜 〇木ををぬき〜

キ 〇月を見〜  
行取下十九ウ 頭書引諸書

委注〇続世継 朝夕ふ〜ぬり〜

そ〜にぬ〜 〇堤中約言 虫先つ〜姫君帖

〜と〜せ〜〇うつ保 祭ほ 明日夕日入子

〜して〜あ〜の〜ぬき〜 〇遊糸日記 上

〜に〜ち〜と〜ぬら〜と〜ま〜あ〜 〇源 模 留

ゆは... 見... 河孫真人云夜夢不須説  
○源 若菜下  
えーを○余枚廿十一して... 注...  
... 同行... 注...  
... 蜂...  
... ○

中誓日記  
急醒。見さち...  
○

○隆信集雪のあゝ... 中畧  
... 二条大皇太后云大貳集  
○

六海いぬ 高藤狗

○ 栄光... 伊帳の海... 中上  
かま... 八...

あゝ

源 神 殿上人も大業のしほもほつてむもろみき

にらほりめさしむせき 若菜下 〇同 之れは

あふあほりたふんき 兼安下 〇字つ保 少将

らうまけ殿め君をりしとらるをいれとらつらほと

まにまうて〇

あゝ 冠辞考

万代秋下 三治百そに 士御内大臣 あゝえの枚のみ かろ 祝し 初瀬の山 〇 つまに

壬二集 意とむぬいほをいれ かろ ぬぬを川瀬の山 きき ぬぬ

あゝ かにもむい

夫木一 菖菱法師 あゝ玉のむ かろ ぬぬを川瀬の山 きき ぬぬ

〇

あゝ かにもむい

万代秋三 丹後 あゝ かにもむい

〇

あゝ かにもむい

夫木七 後松  
うめ花のさくらわひのきつらうさめうらたきりききあはれぬ

○

五言

さうめさるゑ

さつ保 三 春日話  
さつ保 三 春日話  
さつ保 三 春日話

さつ保 三 春日話  
さつ保 三 春日話  
さつ保 三 春日話

さつ保 三 春日話  
さつ保 三 春日話  
さつ保 三 春日話

さつ保 三 春日話  
さつ保 三 春日話  
さつ保 三 春日話

さつ保 三 春日話  
さつ保 三 春日話  
さつ保 三 春日話

調搔 半斤垂水宇璣蒼海波雁鳴調 一説 胡笳

○ さつ保 三 春日話  
さつ保 三 春日話  
さつ保 三 春日話

にらそ ○  
にらそ ○  
にらそ ○

さめーれ 九 田

後拾 萩教  
さめーれ 九 田  
さめーれ 九 田

○

さめーれ 九 田

山家集上  
さめーれ 九 田  
さめーれ 九 田

後拾雜二 士衛門御画劔  
あはれあはれ あはれあはれ

あはれあはれ

拾遺雜賀 あはれあはれ  
あはれあはれ あはれあはれ

あはれあはれ

源須テ あはれあはれ  
あはれあはれ あはれあはれ

あはれあはれ あはれあはれ  
あはれあはれ あはれあはれ

あはれあはれ あはれあはれ  
あはれあはれ あはれあはれ

あはれあはれ あはれあはれ  
あはれあはれ あはれあはれ

あはれあはれ あはれあはれ  
あはれあはれ あはれあはれ

あはれあはれ

五代雜六 あはれあはれ あはれあはれ  
あはれあはれ あはれあはれ

散木春

あはれあはれ あはれあはれ  
あはれあはれ あはれあはれ

○尚遠會序八十段にうけてさへふまへぬさち○大  
和物語 けをいひいふあはれあはれあはれ○

御所様ミヨサマ

大御所

玉勝間 康富記に伏見殿をも 大將軍を御所様  
より又嘉吉二年十一月廿六日参伏見殿候官  
御方御読大御所右御出座との由大御所、貞  
成親王後謚後崇光院をヤサマシ

さらきして 近代

巻九一月宴 さらきしてのほしをききしき 〇大鏡

三 さらきして大御言のむき免の位にきり候候

りきし〇

おしき

千誹 後札  
〇 のききりてききりてききりてききりてききりて

おしきのほう

万代秋下 萬葉法師  
異本拾玉百首より 十五首中

夫木尊 源有仲

おしきのほう、海のちきり  
おしきのほう、海のちきり



○大語コトタカ 遊仙 ○大言出雲風 ○兼元もり元 〇〇〇

久母百久母百 承補 〇〇〇

〇源サマ 〇〇〇 〇〇〇

〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇

〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇

六言

〇〇〇〇〇〇 九重

拾遺長哥 東三条大政 〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇 〇古今長安忠 〇〇〇〇〇〇

中あし

五二集中 〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇

夫木春六 平祐春 〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇

袂衣ニ上 つまのほら 〇源若 〇〇

〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇





○宇つ保 多くそ

あろあろ

清徳の集

あろあろに... 集の... 集の...

あろあろ

山家集下

あろあろのちか... 集の... 集の...

二条大貳集

あめせと... 集の... 集の...

○竹取物語

あろのあに

葉集

あろのあに... 集の... 集の...

謙徳の集

あろのあに... 集の... 集の...

○源 紅葉の 集の... 集の... 集の...

云疑 心生 割免 ○我身ノキスヲイマタ人ハニ

ラ子 正我 心ヨリ思ヒテ人ノじリタラニ

ヤウニ思フヲ云セ

あろのくほ 心隈

後拾雅二 和泉式部

あろのくほ... 集の... 集の...



古今辨  
あつらひの多け  
あつらひの多け  
あつらひの多け

あつらひの多け

山家集上

あつらひの多け

同下

あつらひの多け

万代集一

○

あつらひの多け

隆信集多六

あつらひの多け

○

あつらひの多け

万代集

あつらひの多け

○

あつらひの多け

万代集三

あつらひの多け

拾玉四

あつらひの多け



曾丹集  
後拾雜

思ひきりしに  
あまのこゝろ  
あまのこゝろ  
あまのこゝろ

あまのこゝろ

林葉二

あまのこゝろ  
あまのこゝろ  
あまのこゝろ  
あまのこゝろ

○

あまのこゝろ  
免

月詩集雜下  
清輔朝臣  
○千雜中遠

あまのこゝろ  
あまのこゝろ  
あまのこゝろ  
あまのこゝろ

あまのこゝろ  
○同司  
あまのこゝろ  
あまのこゝろ

あまのこゝろ  
○  
あまのこゝろ  
あまのこゝろ

あまのこゝろ

異本拾玉

あまのこゝろ  
あまのこゝろ  
あまのこゝろ  
あまのこゝろ

○

あまのこゝろ

今様  
あまのこゝろ

長明無名抄下  
あまのこゝろ  
あまのこゝろ  
あまのこゝろ



おのゝもの

大井川行幸和哥序 躬恒 大井川のあつもの

長明無名上 あつもの 清浦は他山より一を岡崎三

位あんせしき あつもの 清浦は序を引て陳せ

林葉四 平七時雨

夕つ あつもの ををるそつあつものにあつもの

万代春下 人丸

ちま あつもの 山とえつあつものあつもの

後堀村下 人丸

山風のふきの海に あつもの ちまをこのあつものにちま

○袋中子三

○袖中十五

保妻女集

あつものあつものあつものあつものあつものあつもの

続後妻中 人丸

あつものあつものあつものあつものあつものあつもの

○躬恒假字序漢河ニ鳥鵲ノヨリハ橋ヲ渡

テコノモカノモニ行カフ○源 夕影 くらんて小

家うちあひいけ あつもの あつものあつもの

うちまろほむて○

おのゝもの

強装束

大装束  
あつもの

海人藻苅云凡装束の衣紋上代ハ沙汰及る

鳥羽院の時時々強き装束を用ふる衣紋の

沙汰出来ぬか上代ハ大装束とてふ

あつもの不調へは而鳥羽院あつもの人の影を

とて鳥羽院に後初りも強装束の衣紋をうき  
もつ、繪師の所是こ。

らるるのさ決

六帖 村衣

千載二 遍因法師

あふゆめさゆり 一巻のあふゆめさゆり  
月詣ち中 皇太后大進  
詩う終てこひあふゆめさゆり

○

らるるのさ決 氷胎離

山家下

あふゆめさゆり 一巻のあふゆめさゆり

らるるのさ決 凍梨

尚齒會序 一巻のあふゆめさゆり

十 田

らるるのさ決

茶元 月宴 十五 あふゆめさゆり

らるるのさ決

あらもゆき

宇都保 一世の源公のち色傳一ひ人にまゝの司家  
の君かあらもゆき傳一〇司家使 若くはゆき人ぬらもゆき  
いひあらもゆき傳一〇すたらもゆきちさし人  
みゆらもゆき傳一〇あらもゆき

あらもゆき

山家集

あらもゆき

新六

あらもゆき

〇

後拾遺

長明無名抄下

長明無名抄下

あらもゆき

濃墨傳

源

〇

枕冊子九

未詳

枕冊子九

〇



204

卷之六

... ..

... ..



